

「去年今年 貫く棒のごときもの」という高浜虚子の俳句があります。「去年今年」は、「去年から今年にかけて」、つまり新年をさす俳句の季語です。去年が終わり新しい年が始まったけれど、貫く棒のような時間の流れは、いつもと同じように流れている、という意味になるでしょう。

私たちが過ごす毎日は、朝が来て日が昇り、夜が来て日が沈むという意味で、どれも同じ一日です。年が改まるといっても、昨日から今日になっただけなのです。

私たちは、大晦日であろうと元旦であろうと、かけがえのない一日を大切に生きなければならぬのです。

けれど、そうであっても、新たな一年が始まる元旦に、特別な気持ちを抱くのもまた、私たちの自然な心のありようです。

悠久なる時間に、何らかの区切りを設け、気持ちの切り替えをし、奮い立たせ、明日に向かって歩いていく力としているのです。

道元禅師は、一月一日の説法で「元旦の特別な教え」について語っています。

「元旦のための、特別な教えについて聞かれたある老師は、特別な教えは『ある』と言われた。元旦はめでたく、ものみなすべてが改まるからである。

また、ある老師は特別な教えは『ない』と言われた。私たちが生きる毎日は、どれもかけがえのないもので、元旦もその一つに過ぎないからである。

『ある』でもよし、『ない』でも良いのだ。つまり、はるかな時間の流れは、私たちの『ある』『ない』という区別をこえたものだからだ」と、説かれました。

時間の流れは、「ある」とか「ない」といった区別をこえていることにふれた上で、道元禅師は、次のように説法を結んでいます。

「ある人が私に、『元旦の特別な教え』はあるのか、と質問したならば、私は『ある』と答えよう。

それはどんな教えかと問われたら、私はこう答える。

『みなそれぞれが幸せでありますように』と。」